

## 四十七 『認識と言語の理論』を学ぶ

この「蝶の雑記帳」は、頭に浮かんだことについて思索をめぐらす試みである。何かテーマらしいものがあってあれこれ考えるのだが、考え違いをし、浅くて部分的な議論しかできないなど、数多くの欠陥を抱えている。まあ、自分の身の丈に合ったことしかできないのである。それでもこの試みをするのは、未熟な果実でも穫り入れる園丁が、成果のない思索だとしてもそれを書きつづる作業を加えて、日々の生活を整えて過ごすためだ。書き記すのに、見かけがよいように形をつくらしたりしている。ほんとうは、まとまりのないものは、自問の形のままにしておいた方がよいのだろうと思ったりする。

さて、「蝶の雑記帳三十九」に、チョムスキーの講演録『我々はどうのような生き物なのか』に導かれて考えたことを記した。ところが、アマゾンのレヴューアーの一人が彼の言語論をとてども手厳しく批評していることに気づいてとまどった。わたしは、チョムスキーの構想が認識論の構えに関係していると受け取っていた。この理解が必ずしも彼の「生成文法論」の一般的な位置づけになじまないことを、別の書物『文化進化論』を読んで知っ

た。そのことは「蝶の雑記帳四十四」に書きとめている。激しいチョムスキー批判をした先のレヴェュアーによって、三浦つとむという人が言語について『認識と言語の理論』という重要な書物を書いていること、そして、その「言語過程説」への展開を川島正平という人がまとめた『言語過程説の研究』があることを知った。ちょうど暑くなってきた時季のことで、「言語過程説」の概要を、一冊の概説書である『言語過程説の研究』で知ろうと思った。古本でしか手に入らないその書物に一万円を超える高値がついていることにびっくりし、図書館で借りて読んだ。

川島正平は、ソシユールが言語を「人間の頭の中にある観念的な記号の体系」としたのに対して、時枝誠記が言語の「表現行為および理解行為」に注目する見方を提出したのを受けて、三浦つとむが、観点を広げ、言語を、「対象」を「認識」して「表現」する一連の過程としてとらえる理論に発展させた、と整理する。わたしは、近代言語学を開始した人に、日本の研究者が独自の言語論で対抗したことを喜んだが、ソシユールの『一般言語学講義』と時枝誠記の『国語学言論』を読んだ記憶も薄れていて、論点を具体的に比較して考えることはできない。ただ、ソシユールに対する批判が強く響くその記述に対して、ソシユールの「講義録」は、多くの優れた考察を含んでいて、その後のヨーロッパの思想に大きな影響を与え、言語の分節論が「構造主義」まで生み出したのだから、『一般言語

学講義』を一概に批判するだけで事は終わらないだろうと思った。ともかく大局的に観ると、ソシュールが「言語」を限定して個別科学にしようとしたのに対して、時枝誠記は、ソシュールが二次的な課題とした主体の表現行為などを論じて、ソシュール言語学の不備を衝いたのだと考えることができそうだ。そして三浦つとむは、言語の背後にあって言語を支える認識に踏み込み、さらに、言語が外在化する表現の過程まで考察して、言語の欠かせない要素を網羅した言語基礎論を展開しようとした、と見ることができるだろう。

『言語過程説の研究』に物足りなかったわたしは、『認識と言語の理論』に直接当たる必要を感じた。そして、硬派の議論にとり組んで早の夏に汗をかくことになった。

\*      \*

三浦つとむ著『認識と言語の理論』は三部構成である。補遺である第三部まで手が回らず、第一部と第二部を読んだ。「まえがき」に著者の基本的な考え方が表明されている。――まず、大きな観点から言語の本質を考えるのだ、と。そして、「言語をさまざまな表現の中の種類ととらえ、表現一般は他の人間と精神的な交通を行おうとして生まれること」を指摘し、その「交通」では「精神的と物質的、個人的と社会的などの対立した両側

面がむすびつき、からみながら発展していく」、また、「認識は言語にとって直接の基盤で、言語規範も認識の一形態であるが、これらはまた言語の側から規定される」と、言語と認識さらに表現の「深く多面的な関係」を指摘する。ここにも表われているように、著者の立場あるいは方法は、「世界を複合的で過程的なできごととしてとらえる」唯物弁証法である。三浦は、それを言語の理論的研究に適用して、認識の成立から表現にいたる過程の構造を説明することが課題だと言う。認識と表現については、「言語・映画・音楽などはいずれも作者の心の摸像であり、心すなわち認識」に対する摸像（すなわち表現）をそのむすびつきにおいて正しく区別することが必要であり、切りはなすことも混同することともにあやまりである」とする考えを述べ、さらに、「言語表現以前に頭の中に存在しているのは、語法・文法を規定した言語規範とそれに媒介された概念であって、それら自体は言語でも何でもない」という判断を表明する。――

三浦は、言語を「認識と表現」の広い枠組みの中で考察する。そういう枠組みはそれまでの言語の理論でそれほど意識的に採用されていなかったようだから、言語を新しい切り口で論じることができる。その創見が彼をとて有利な立場に立たせるのである。しかし、「表現以前に頭の中にあるものは言語でも何でもない」と言い切る文は強すぎて、わたしは疑問に思う。言語をそのようにとらえれば、言語学を立ち上げるため言語に限定的な定

義を与えたソシユールの出発点を否定することになる。ソシユール批判がついてまわり、ヨーロッパで発展させられた言語学との統合を妨げるだろう。

第一章は「認識論と矛盾論」というタイトルで、第一節「認識論と言語学との関係」は、精神活動に関する学問がいまだに哲学と名のるものによりかかっていることへの批判で始まり、その原因が認識についての科学的な理論を持たないためであるとする。そして、「言語は話し手や書き手の頭の中にまず訴えようとする思想や感情が成立し、それから音声や文字を創造する活動がはじまるのである」として、言語学にとって必要な認識論を述べ始める。わたしは、書物の表題から、いくらか認識論が展開されるものと期待していた。ところが、「認識は現実の世界の映像であり模写である」という言葉が初めの方にあるだけで、人間がどのようにして認識に達するかという理論は語られない。それは、著者が、認識論は唯物弁証法に含まれているのであって、唯物論的「反映論」がその認識論だと考えているからようだ。第一部全体が「認識の発展」というタイトルで論述されるのに、期待したような認識の仕組みや認識の道筋は考察されない。したがって、第二部の「言語の理論」でも、認識から言語が生み出される機序も十分には議論されない。わたしは、「反映論」を知らないから、この処理の仕方に不満だった。「反映論」の書物を探してみても

適当なものは見つからない。どうも、認識論をまとめた形で展開してみせる「反映論」の論述はいらない。

代わりに、言語に関連する認識論的に重要な概念が、唯物弁証法によって議論される。ところで、唯物弁証法は体系的な知識のようなものではない。唯物論も、ヘーゲルから觀念論的な部分を削り取った弁証法も、マルクス主義学習用の教科書にあるのかもしれないが、しっかりした論述はマルクスやエンゲルスの書物の中にある。つまり、唯物弁証法は、具体的な問題に直面して運用すべき原理か方法に近い。『認識と言語の理論』の論述があのようである理由の一つは、唯物弁証法のその性質によるのだろう。三浦つとむの唯物弁証法は熟練を積んだ優れたものだと思う。マルクスとエンゲルスの著作をある程度かじったことのあるわたしは、修得に雲泥の差があることを教えられた。この書物ではエンゲルスがしばしば引用されるが、著者がマルクスとエンゲルスを読み込んで自分のものになっていることが論述に現われている。読み進むにつれて、多くの注目すべき文章に出会う。

第一節の「認識は現実の世界の映像であり模写である」という言葉のある第二段落に、人間の生活が物質的にも精神的にも交通関係をむすぶことで成り立っていることが指摘され、註に、マルクスの含蓄ある言葉「もろもろの個人は、たしかに肉体的にも精神的に

も相互につくり合う」が引用されている。人間のあいだの「交通関係」は一般的な事実を述べているにすぎないようでいて、よく考えてみれば、人間が認識と言語を生み出す本質的な契機である。三浦は、人間が、「精神的交通関係をむすんで、他の人間の認識を自己の頭に受けとめたり自己の認識を他の人間に伝えたりしなければならず」、それを言語によって実行していると述べる。ここで、この交通関係によって、「認識がさらに広く深くなる」ことを指摘し、また、「人間の認識は社会的なもの」になることも言い忘れない。あとの方でも、「認識が成立してから言語に表現されるという過程をとる以上、認識は言語のよって立つ基盤にちがいないけれども、言語のほうからもまた認識のありかたを規定してくるのであって、ここに相互関係が存在している。それで認識について論じるときには言語について触れないわけにはいなくなる」ということが確認される。そして、現実の言語のあり方を反省し、交通関係をむすぶ手段である音声言語と文字言語にふれ、言語の背後に人間の認識がひそんでいてさらに現実の世界につながっていることまで述べて、「言語を理解するにはこの過程的構造を正しくとらえなければならぬ」と課題を表明する。最初の三つの段落に、言語基礎論の骨子が構想として提示されているのである。ここを深く耕せば「認識と言語」の認識が深まるだろう、とわたしも思う。

三浦は、「言語学の確立にはどうしても認識論の援助を必要とし、もし認識論があやま

っているにもかかわらずそれに依存した場合には、言語学の直接の基礎となつてゐる存在をあやまつて解釈するのであるから、言語学もまたあやまつた方向をとることにならう」と強調する。そして、言語学の現状がそれほど進んだものでないと判定し、「なぜ・いかにして・単語を構成していくのかという問題」が、「人間の認識構造と深くかわりあつてゐる」から、現在の文法論の対立を検討するにも正しい認識論が必要だと考える。ところが、肝心の認識論については、「認識の科学も、科学者の手によつて一つの個別科学として体系化されなければならない」と述べるだけで、認識論の現在までの状況についての議論に入つてしまふ。その議論は哲学批判であり、ソシュールの流れをくむ学派や論理実証主義者の記号論も、正しい認識論ではない不可知論ないし観念論の立場に立ち不純だとする。俗流唯物論者や自称マルク主義者の議論も、練達の唯物弁証法の鋭い眼を逃れることはできない。そうして、第一章第一節は、「言語学の建設へとすすむためには、まず認識論を哲学から脱皮させることが先決問題なのである」と締めくくられる。

先ほどの「認識の科学も、科学者の手によつて一つの個別科学として体系化されなければならない」という言葉は、個別科学としての認識の研究がまだ進んでいないことを言うのだろうか、「認識の発展を論述する」とされる第一部は、これ以後、認識論を体系的に

記述しようとはしない。「認識論を哲学から脱皮させる先決問題」の解決が、認識や言語に関係するさまざまな観点や概念を唯物弁証法で論じることによって遂行される。つまり、言語論の展開に必要な観点や概念などを整理して、第二部への準備が行なわれるのである。だがせっかちなわたしは、その論述が言語学への準備としては手の広げすぎだと感じた。第四章ではパプロフ理論とフロイト理論が取り上げられるが、心理や意識が認識に関わる重要なことがらだとしても、現代から見れば不十分な理論の批判に第一部の三分の一も費やす必要があったか疑問に思う。第二章「科学・芸術・宗教」と第三章「規範の諸形態」も、認識と表現の重要な諸側面と言語を貫く規範について、大きな構えの中で論じる。啓発されるところがあるけれども、認識から言語への議論としては広がりすぎ、要点を把握するのに難があると思った。当たるを幸い広い分野の言説を批判する鋭い論法は、言語学者を遠ざけたかもしれない。しかしながら、第一部には、第一章第三節の「人間の観念的な自己分裂」など独自のおもしろい論じ方がある。

\*       \*

第二部「言語の理論」の第一章は、大事な「認識から表現へ」の移行を考察する。けれ

ども、この局面も実証的な研究は進んでいないから、議論は思弁的なものになる。著者は、表現一般を視野に収めながら、認識から言語への道筋をつけようと考察を進める。「対象を認識する場合には対象の精神的な摸像をつくり出し、反映とよばれる関係が成立」するけれども、「これをさらに他の人間に伝える場合には逆に精神の物質的な摸像をつくり出し、これを他の人間の認識の対象として提供するかたちをとらなければならない」。そこで「赤ん坊でも、精神活動を肉体で示そうとする」が、「それは、精神のありかたをそれに対応する物質的なありかたに摸写し、それによって他の人間に理解できるよう表面化したという意味で、表現とよばれる」。これが、「認識が表現へもたらされる過程」の三浦による概括的な説明である。

三浦は、物質的な存在となった表現を強調するが、表現には意味と内容が伴い、「表現された個々の語の内容には規範によって定められた抽象的な対象との結びつきがふくまれている」と指摘する。第二節からは、言語もその一つである表現の形式と内容について、唯物弁証法からの議論が続く。その中で、「認識が、客観的な物質的な世界の、精神的な摸像として成立し」、「表現が、主観的な精神的な世界の、物質的な摸像として成立する」ことが確認される。形式と内容の議論の途上で、「表現の内容は対象にも作者の認識にも鑑賞者の認識にも存在せず」、「内容は作品に存在する」という結論が提出される。

言語が貨幣と似ていることを論じる第六節は精彩がある。この節に、「認識内容は認識それ自体ではなく、それから媒介される関係をさす」という重要な文がある。「表現の内容は関係」なのである。われわれは、その「内容をつかむ」のに、「関係を逆にたどって、作者の頭の中の認識へ、対象へと、その背後にあったはずの関係した存在をたぐっていく」（ここでは、いったん表現されたものを通して再現される認識行為つまり対象と関係の再認識が取り上げられている。再帰的な認識があり、そこに他者が介入できるのである）。続く節でも形式と内容を軸に個別の話題を論じて、言語表出について次のような説明に至る。「内容を関係概念で正しくとらえれば、表現形式を創造することすなわち声を出したり文字を描いたりすることと同時にそこに作者の認識との関係も想像されるわけで、形式の成立は同時に内容の成立だということになる」と。そして、言語について、「言語・記号・象徴などといわれるものは表現で、物質的な像として存在するのであるから、その像は実体によって支えられているとはいえ、実体と直接の関係を持たない」ことを念押しする。

第二章「言語表現の二重性」は、「認識は感覚を出発点として意志にいたる立体的な構造を持つており、さまざまな部分から構成される」という言葉で始まり、認識に意志が含まれることに注意を促す。したがって、表現が「客体についての表現であるばかりでなく

主体についての表現」になることを明確にする。そして三浦は、「この言語表現の二重性、あるいは言語で表現される認識の二重性格の問題は、自分によつてはじめて批判的に指摘され展開された」と宣言する。つけ足せば、次の節に、本居宣長が「言語表現における意と事と言との不可分關係」を指摘していたことが挙げである。また、言語表現は「自己創造的であるとともに摸写でもある」という表現がある。

続いて、表現の構造についての議論に入り、以下のような判断が示される。「言語および記号は、絵画のように感覚ないし直感を忠実に表現するのではなく、概念ないし普遍的な認識を直接に表現する」。「言語表現は、規範によつて表現が媒介されるという特殊性」をもち、「その規範は社会的に成立」している。三浦は、先に「表現以前に頭の中にあるものは言語でも何でもない」と言ったが、「言語は音声あるいは文字として存在するが、物理的な存在としての音声あるいは文字それ自体が言語なのではない」とも言う。そして、唯物論の立場を、「言語は表現であつて、表現活動それ自体ではない」という趣旨の言葉を置いて、「表現活動が物理的存在に対象化されてそこに表現が成立するのである」という言い方で貫こうとする。

いよいよ言語の本質的な性格が示される。言語は、「対象をとらえるとき、『一般化』

して表象としてから概念化するなり、あるいは直接に『普遍相』を概念としてとらえるなりして、それを表現するのである」。言語は概念を表示するのである。「概念以前の対象や認識のありかたの差異は表現の向こう側にかくれてしまつて、聞き手や読み手が言語表現から直接にとらえることができるのはすべて話し手や書き手の概念でしかないのである」。そして今度は、「概念とよばれる認識」のことが考察される。重要なことは、「感覚や表象を通じて成立した概念は、感性的な認識と切りはなしえないにもかかわらず、感性的な認識と関係なく運動できる」こと、「われわれが、この概念の相対的な独立を利用して、概念を頭の中で運用して思惟できる」ことである。ここに、思惟という人間の認識の中心的な働きが出現するのである。「概念の運用のためには概念を区別しなければならぬが、それを人間は現実の世界の事物の区別の方法を適用して遂行する」。すなわち、「超感性的な概念に言語という手がかりを与えて」遂行するのである。ここでの区別は、「事物における普遍性を見つめて対象を類的存在において概念としてとらえ、音声や文字を種類とする類的創造において表現する」のである。ところが、「種類としての普遍的な側面が言語としての表現だから、それは対象の感性的なかたちからいくらかでも遊離できる」。そうして、「表現のかたちと概念の感性的な手がかりとのあいだに相互関係が成立し発展した」のである。

第二章ではさらに、言語表現に非言語的表現が伴うことが指摘される。また、客体的表現と主体的表現との差を日本語にむすびつけた興味深い議論がある。それは、江戸時代の鈴木艮（あきら）という人から時枝誠記へと受け継がれた「詞」と「辞」を分類する論、すなわち、「てにをは」（辞）が名詞など事物を表わす詞と異なるという主張である。三浦は、この論を発展させて、詞は客体的表現を担う言葉で、辞は主体的表現を行なうための言葉であることを明らかにして、時枝誠記の言う日本語に特徴的な「詞＋辞」の構造を明快に分析してみせる。この点でヨーロッパの言語は客体的表現と主体的表現が癒着しているのに対し、日本語の方が客体的表現と主体的表現をよく区別できる、というのである。この指摘は、日本語を使って考えるわたしを大いに啓発してくれた。

さて、それにしても、この書物を正確に理解しようとするあまり、記述が抜粋ばかりになってしまった。なかなか骨の折れる仕事で、抜け落ちた論点が多いにちがいない。言語学に入ってからこれを続けるのはおもしろくないだろう。それに、わたしの主な関心は、認識と言語の基礎的なプロセスを知ろうとすることにある。唐突だが、言語学の具体的な問題に議論の重心が移るこれ以後の部分は端折ることにしよう。

## \* 感想

『認識と言語の理論』の本の帯には、「正しい認識論をもたない限り、言語論は無価値で、多くの害悪を流す」と書いてある。たしかに「認識と言語」について一般的かつ重要な論述がなされている。けれどもこの書物は、わたしの期待したような認識論と言語への関連を十分提示してくれなかった。その期待とは、認識のプロセスとそこからの言語生成の機構、さらに言語から認識へのフィードバックなどをもっと踏み込んで考察することである。この書物は、近代の認識論の出発点になったカントの認識論を不可知論として切り捨て認識のプロセスを論じる姿勢をもたない。また、もっぱら言語規範の社会性に注目して、認識にある論理構造と対応する言語の論理構造との議論が足りないように思う。半世紀も前に書かれた書物だから仕方のないことだけれども、唯物論と言いながら、頭の中の脳的作用にまで考えを及ぼそうとはしない。それらは著書の主眼ではなかったのだろう。わたしの欲張りな関心は、「認識と言語」について今言ったことを含んでまとまりのある理解を求めている。おりおりまた考えてみることにしよう。

